

I

5 10 15 20 25

16世紀のスペインは、カルロス1世の時代に新大陸の征服を進め、またハプスブルク帝国の一角としてプレヴェザの海戦でオスマン帝国と戦ったが敗れた。カルロス1世から王位と新大陸・ネーデルラントなどを継承したフェリペ2世の時代には、レパントの海戦でオスマン帝国に勝利して西地中海のキリスト教世界を守り威信を高めた。またフィリピンを植民地化し、ポルトガルを併合して「太陽の沈まぬ国」を形成した。ヨーロッパではカトリックの盟主を自任し、新教徒と敵対したためネーデルラントで新教徒の反乱を招き、反乱を支援したイギリスにアルマダ海戦で敗れ制海権を失った。フランスのユグノー戦争にも干渉したが失敗した。17世紀のスペインは、新大陸産の銀の枯渇や重税で経済が疲弊するなか、カトリック側を支援して三十年戦争に介入したが失敗し、オランダの独立を認めた。またポルトガルが分離独立し、フランスとの戦争にも敗れて国際的地位が低下した。

II

5 10 15 20 25

ソ連はスターリンの死去によって恐怖政治や個人崇拜を緩和して集団指導体制に移行した。また冷戦の対決姿勢から平和共存に転換し、朝鮮戦争の休戦を容認した後、ジュネーヴ4巨頭会談に参加し、ユーゴスラヴィアとの和解や西ドイツとの国交樹立を行った。ソ連共産党第20回大会でスターリン批判を行うことでそれらの方針を明示し、コミンフォルムを解散させ、日本とも国交を結んだ。しかしこうした方針転換はソ連を中心とする社会主義陣営を動揺させ、東欧では民主化運動が高まり、ポーランドとハンガリーで反政府運動が発生した。ポーランドではソ連軍の介入を恐れたゴムウカが強引に事態を收拾した一方、ハンガリーはワルシャワ条約機構脱退を掲げたため、ソ連はハンガリーに軍事介入を行い親ソ派の政権を復活させることで、東欧への影響力を維持しようとした。また中国はスターリン批判やアメリカとの平和共存に反発し、中ソ論争が始まり中ソ関係は悪化した。

III

5 10 15 20 25

1 直接的な契機は第4次中東戦争である。第一次世界大戦終結後、敗戦国となったオスマン帝国の領土であったパレスチナはイギリスの委任統治領となり、バルフォア宣言に基づき入植したユダヤ人と先住のアラブ人との対立が激化した。第二次世界大戦前後にユダヤ人がさらに流入するなか、国際連合のパレスチナ分割案に基づきユダヤ人がイスラエルを建国すると、アラブ諸国との中東戦争が勃発した。その後、資源ナショナリズムが高まるなかで産油国がOPECを、第3次中東戦争の敗戦を機にアラブ諸国がOAPECを結成した。敗戦後の失地回復を図るエジプト・シリアが第4次中東戦争を起こすと、OAPECが石油戦略を発動した。2スタグフレーションが起こったことで高度経済成長が終わった。以後、エネルギー源として石油への依存を弱め、天然ガスや原子力の比重を高めた。省エネ化が進んだことで自動車などの分野で国際競争力を強め、安定成長下で経済大国となった。